

東京地裁は当然「免訴判決」を言い渡すべきだったと私たちは考え、「免訴」を要求する再審請求を行なおうと考えています。「免訴」という訴訟手続きに関する法律論を含む今後の運動の方向について議論すること、これが3月30日の集会の第3の論点でした。

55年の歳月を経ても、当時の問題が薄められたわけではなく、安倍右傾化路線の下ですますこの問題は重要性・緊急性を増している私たちには考えます。

(しおかわ・よしのぶ／伊達判決を生かす会)

\*砂川事件の刑事訴訟記録のすべてと解説を収録したCD・ROMを販売中です。

頒価2000円。お求めは、左記へ。

伊達判決を生かす会・FAX:03-3233917870宛て。名前、住所、電話番号を明記の上、申し込んでください。現物とともに振り込み用紙をお送りいたします。



写真集「米軍基地を返還させた砂川闘争」より

## 追悼

### 模索舎の創立者、 五味正彦さん

高橋武智



1946年生まれの実業家五味正彦さんは、昨年9月24日に食道ガンのため亡くなりました。故人の遺志により、葬儀などをせず、11月に東京湾に散骨したということです。

五味さんはベ平連に参加、早大在学中に学ベ連(学生ベ平連)を組織した活動家の一人でしたが、ベトナム戦後の70年、仲間を語らって、オルタナティブなミニコミなど小出版物を販売する有限会社「模索舎」を新宿2丁目に開店、その代表となりました。模索舎は今も休日なしの健在ぶりで、たとえば、わだつみ会の機関誌の発行ごとに、部数は多いとはいえませんが、必ず店頭置いてくれています。

72年に、永井荷風作の戯作『四畳半襖の下張』を『面白半分』編集長の野坂昭如が出版したとき、猥褻文書頒布のことで起訴され、文壇あげての応援にもかかわらず、最高裁でも、わいせつ文書と判定され、敗訴しました。

模索舎はこの雑誌を文字どおり店売していたわけですから、五味さんも逮捕・起訴され、裁判としては別ですが、同じ日に最高裁で敗れました。公判で、弁護士の川端和治さんが作品を全文朗読させた話は今に語りつがれています。

つづいて88年には、(有)ほんコミニケート社を新宿に創立(のちに東京武蔵野市に移転)、社長となりました。規模は小さくとも、志ある本を出版する目的で、今も健在です。ほく自身、調べものをするたびに重宝している『ベ平連ニュース・縮刷版』(編集:ベ平連)の配本元は、ほんコミニケート社です。

特定秘密保護法を契機に、言論出版の自由の意義があらためて強調されていますが、五味さんの半生は、二つの会社を通じて、自立的な小出版物の発行と流通に実質的な貢献をしてきたといえるのではないでしょうか。

ここで、ベ平連の線とは異なる意外な証言を追加しましょう。本誌先月号の「本の紹介」欄でとりあげた『強制連行 万人坑』の著者・関谷興仁さんは、中学生時代の五味さんの先生でした。五味さんにどういう精神的影響を与えたかは、ご本人にでも聞かないかぎり分かりませんが、60〜70年頃、激しい街頭デモで出会ったときなど、関谷さんは「怪我しないようにしろよ」と声をかけたということです。

陶芸家になった関谷さんが「強制連行」のテーマにとりくむことを決めたとき、同じ意識をもっていた五味さんは共鳴して、花岡まで同行してくれたそうです。その折に、間伐材から割り箸をつくるエコの運動の普及流通の拠点にも立ち寄ったそうで、五味さんの文物の流通にかけた強い意気込みを知ることができます。

(たかはし・たけとも／本誌編集委員)

(写真は木本晴子)